

遠江・山と里の民俗

会報 第 25 号

いっしょに

浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会



会長
渥美 位茂
のりしげ

このたび、初代の前嶋会長の後任として会長職を拝命した、滝沢放歌踊り保存会の渥美位茂と申します。

さて、平成二十五年に十九の保存会の参加で発足した浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会は、現在では二十二の保存会が参加して祭や芸能の保存と継承に尽力しています。しかし、中山間地域の人口減少（過疎化）と少子高齢化は益々大きな課題となっています。それだけではなく、二十二の保存会が行っている祭りや芸能には違いがあり、地域性も含めてそれぞれに課題を抱えています。

浜松市は民俗芸能の宝庫ともいわれ、浜松の風土と歴史の中で培われた「伝統文化」が脈々と息づいています。その「伝統文化」を後世に引き継げるように、連絡会の活動に取り組んでいく所存です。今後もし引き続きご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

細江神社祇園祭

古記録に見る祭りの起源

細江神社は江戸時代には牛頭天王社と呼ばれていました。この牛頭天王は疫病退散の神として江戸時代には全国に信仰が広がりました。そして、細江神社は京都の八坂神社を含めて祇園祭が行われる一一七社の一つとなっています。



細江神社の祇園祭は気賀の郷を流れる川を清め、郷人たちを疫病から守るために始まりました（始まった年等不明）。そのため、都田川と井伊谷川が合流する落合から川の下流にある村（下村）まで神輿が海上渡御し、神社に帰還する形ができました。祭の三日前に神輿が御旅所に出御する時の獅子舞は、下村の者が必ず行いました。

今では獅子舞は行いませんが、当時の下村の神輿上陸地では今でも帰還途中に祭祀を行っています。

その他、海上渡御の時には他村の者一人といえども乗船は禁止されていました。（但し、広岡村の男子は許されました）また、船の漕ぎ手は伊目村の者が担当すること等が厳しく決められていました。

「ご神体漂着の赤池」

明応七（一四九八）年の地震による大津波で細江神社の社殿はことごとく流没しました。その時に新居の角避比古神社（つのさくひこじんじゃ）のご神体が気賀の赤池に着御しました。村人は赤池に仮屋を建て祀っていましたが、永正七（一五〇〇）年に細江神社の新しい社殿が完成すると、そこに遷座しました。

それからは、ご神体の仮神座の地として、祇園祭での神輿巡行の折に赤池で祭祀を行っています。赤池周辺の地名を住民は仮屋に改め、祭祀の準備等、赤池巡行を支えています。

赤池にはご神体だけではなく、御福面も漂着しました。この面は狂言の乙のようなお多福面で、両頬のふくらみを強調し、えくぼのようなくぼみが見られます。また、額を突き出させ、鼻を低くして丸みを

つけています。材質は桐です。



赤池漂着の御福面

法螺貝で始まった祭

京都八坂神社の祇園祭では、現在でも山伏が参加しています。今から二七七年前の延享五（一七四八）年の記録には、細江神社の祇園祭でも長樂寺の山伏が代官の許可を得て祭に参加しています。この山伏は五人で、神輿の御供をし、法螺貝を次の五つの場面で吹くことが決められています。

一 神輿出御の時
一 落合にてお舟出発の時
一 下村へお舟到着の時
一 西町（気賀宿入口）に神輿到着を知らせる時
一 神輿御入の時

現在では山伏の参加はありませんが、その名残として落合からお舟が出発するときに

花火を盛大に打ち上げて住民に知らせています。

祇園祭に欠かせない屋台

細江神社の祇園祭で使われる屋台は、京都の山鉦と同じように町や川、通りから疫病の神である疫神（えきじん）を集める依代（よりしろ）として神輿を先導しています。そして、疫神は賑やかなものや尖ったもの（竹や松、杉、輝くもの（明るいもの）を好むと言われているため、竹に提灯を付け、賑やかに祇園ばやしを奏でます。また、屋台の幕には八坂神社の御神紋である左三つ巴紋や五爪に唐花紋のどちらかをつけています。江戸時代には、上村町（現在の土町、清水地区）の者が引き屋台の運行を支配したとあります。



お囃子を披露する屋台

行列に鷹匠

江戸時代の行列の先頭は「山椒払い」でした。鬼の面をつけ、神の代わりに山椒の枝を持ち、邪気払いとして行列に参加しました。残念ながら、現在はその姿を見ることはできません。明治以降、行列に鷹匠が加わります。鷹匠は、小森地区の男児が扮します。これは、かつて小森地区に江戸幕府の鷹狩り場があったことが理由とされ、全国的にも珍しい行列となっています。

神輿の海上渡御

長野県阿南町には、深見の祇園祭があります。山里のなだらかな斜面にある伊那谷唯一の天然の湖で行われる祇園祭は、京都の八坂神社と並んで牛頭天王信仰の中心地である尾張の津島神社から伝播しました。細江神社祇園祭も同様で、二艘並べた船の上に屋台を乗せて海上渡御を行う津島神社の祭に似ていることから、津島神社からの伝播と考えられています。

（参考文献）

- ・細江神社誌
- ・細江神社考（復刻版）
- ・細江のあゆみ
- ・細江町史（通史編下）
- ・細江町史（資料編七）



川合花の舞

(天竜区佐久間町)

2024 クラウドファンディング

目標額を達成!!

浜松市天竜区には鎌倉時代より受け継がれている湯立神楽「川合花の舞」があります。しかし、地域の人口減少に伴う担い手不足、舞手の減少、保存会員の高齢化による労力不足などの問題があります。二〇二四年、歴史ある「川合花の舞」を後世に伝えるため、クラウドファンディングによる資金調達を実施したところ、見事、目標額を達成しました。

川合花の舞保存会

笹野良太さんが

クラウドファンディング

で呼びかけたコメント

「川合花の舞で、鬼を舞える唯一の三十代です。川合花の舞が心から好きで、人生を花の舞に注いできました。コロナを経て、舞手・人手不足で、短縮して開催しておりますが、鎌倉時代から続く大事な地元の伝統芸能である「川合花の舞」を何とか絶やさず、地元そして日本の皆様により認知されることを心から願っております。皆様、ぜひ日本の地方の山間部に残る伝統芸能への関心を寄せていただき、文化保存へのご協力をよろしくおねがいします。」

支援者からのメッセージ

*子供の頃に見に行きました。
*地域の宝を守る取組、素晴らしいです。大変なことばかりと思いますが、頑張ってください
*文化を絶やさぬよう活動されていることに感謝いたします。

【クラウドファンディング概要】

- ・プロジェクトオーナー：株式会社奥遠州 X
- ・募集期間：2024 年 9 月 19 日～10 月 24 日
- ・目標金額：500,000 円
- ・支援メニュー、返礼品
- ◇ 1,000 円 鬼からのお礼メッセージ
- ◇ 3,000 円 お名前掲載 (1 年間)
- ◇ 5,000 円 グッズ。笹野家のお茶 20 g。
- ◇ 50,000 円 お名前掲載 (ご希望される期間)
- ・支援総額：586,000 円 (117%達成)
- ・支援者数：90 人

支援金は設備費、広告費、運営費に充てられます。



返礼カード

二〇二五デジタルポスター

佐久間町川合出身のアーティスト

本間ちゑさん
デザイン



本間ちゑさんより

この祭りの根底にある「ウマレキヨマリ」とは、コスモロジーを表現していると私は思います。神であり大自然を象徴する神鬼の、反閉という足踏で表現される大地の死と再生、湯釜の周りを回転する舞。水は火の力で蒸気となり、また川へ戻る。私たちの細胞が新陳代謝を繰り返して生命が維持されるように、この神楽にも「再生」「循環」という、本質的・原初的な豊かさへの祈りが込められているのだと感じます。そしてこのあらゆるものが交差する「場」で神と人が渾然一体となる、特別な一夜でもあります。花の舞の開催には、大

変な準備と労力がかかっていることも、最近になってようやく知りました。これほどのご神事が地元の方々によって、たゆみなく続けられてきたことに心より敬意を表するとともに、伝統ある神事芸能というものはおしなべて「目に見えないけれど、世の中の均衡を保つ一端を担っている」ような気がしてなりません。ポスターのデザインは、私という生命を育んでくれたこの川合という土地と、お世話になってきた地元の方々に感謝を込めて、またこの祭りの、魂が湧き立つ原初的な魅力と神秘性を表現できればと思います。

「懐山のおくない」の刀剣

浜松市秋野不矩美術館学芸員 田中宏子

刀剣

刀剣は武器としての使用のほかにも三種の神器の一つとして挙げられたり、石上神宮、鹿島神宮では刀剣が御神体となったりするなど、神そのものの、あるいは神が宿る依り代として用いられてきました。

また、鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』建仁三年六月四日の記載には、將軍源頼家に洞窟の探検を命じられた新田忠常一行は中で怪しいものを発見し、それを見たときに四人が死亡してしまつたが、頼家から賜つた刀剣を穴の中の河に投げ入れることで無事に洞窟から帰還することができた、と書かれています。刀剣に対して何かを切るための実用的な役割だけでなく、呪術的な要素が見出されていることがわかります。

その他に、江戸時代には武士のみ二本差しが許されるなど、身分を示すものとしても用いられました。



両剣の舞

昔は信賴している部下を「懐刀」と呼ぶことがありました。日本の歴史上、弓矢や鉄砲等、刀剣以外の戦闘道具もありましたが、腰に身に着ける刀剣は敵が目前に迫った時に自分の命を懸けて戦う際に使用され、精神的な支えという意味でもとりわけ重要な武器として扱われてきました。

寺野のひよんどりや川名のひよんどり、神澤おくない、黒澤田楽でも「片剣の舞」、「両剣の舞」の両方、あるいは片方のみで舞われています。また、少し離れた地域ですが、国道一五二号線を北上した先にある遠山郷で冬至の頃に行われている「霜月神楽」でも「剣の舞」が行われ、この舞も刀によって邪なものを伏せたり祓ったりする神事として行われています。

現在、懐山のおくないで使用されている刀剣は二点あり、平時は個人宅で保管され、お祭りの際に泰蔵院に持ってきて使用します。二点とも大磨上無銘（後世に短くしたため刀匠の銘が切られて無くなっている状態）の刀で、その姿から一点は室町時代後期頃、もう一点は江戸時代前期頃と考えられます。

しかし、刀身は以前、かなり錆が出ていたものを日本刀の研師でない人が錆を落としたため錆（しのぎ、刀身にある稜線）が不鮮明となり、地刃を観察することが出来ない状態となっていました。また、刀身には赤錆が出ており、刀身自体を蝕んでいくので、その進行が心配です。茎（なかご、刀身の手に持つ部分）も新しい錆が発生して膨れていたため、柄から刀身を外すことが難しく、叩き出すことで柄を外すことが出来ました。

剣の舞

懐山のおくないの刀剣

す。鞘割れを起こしているのか、両方とも黒のビニールテープが巻かれ、ところどころ漆が剥落しています。おおよそ江戸時代の拵（こしらえ）と見られますが、鐙（こじり）や栗形、鰭（はばき）の上貝、柄巻の一部などが、それぞれに欠損部分が確認できます。

現在も舞で使用している刀剣なので、今回の調査の際に茎の錆を一部落として柄から外しやすくし、手入れを容易にできるようにしました。また、目釘が曲がっており、このまま使用して目釘が折れると刀剣が飛び出して危険なため、目釘を新調しました。刀剣は手入れをしないと傷んでいきます。懐山のおくないで使われてきた刀剣を今後も大切に保存していただければと思います。

拵（こしらえ、刀剣の外装）は、一点は黒石目地塗の鞘で、もう一点は黒漆塗りの鞘で



懐山のおくないの刀剣
(登録済み)